

# 藤田嗣治『黙示録』三連作について

天一美術館  
片野道子

近年、藤田嗣治（1886 - 1968）に関する諸々の動向は大変な活況を呈しており、画業に対する研究は既に相当の蓄積が成されている。しかし1959年の洗礼以降に制作した宗教画については検討の余地が残されていると考える。それらは多く「平和への祈り」や「信仰心の表明」というような漠然とした言葉で捉えられ、それ以上の追究が無いまま据え置かれている感が否めない。藤田の宗教画に平和の希求や信仰告白が込められていることは否定しえないが、画家の没後50年という節目を前に、藤田の宗教画の意義を、個別作品の検討を軸に今一度問い直す必要があると思われる。本発表では洗礼と同時期の宗教画でありながら従来あまり注目されることのなかった『黙示録』三連作（1959年 - 1960年、山梨県立美術館蔵）を取り上げる。画面の分析と当人の日記の記述を手掛かりに、本連作は藤田が「黙示録」という宗教主題を本質的に理解した結果であるという可能性を示したい。

3枚の羊皮紙に水彩で描かれた本連作は、豪華本『アポカリプス』のための挿絵として制作されたものである。これはパリの出版社社長ジョゼフ・フォレ（1901 - 1991）が企画した限定1部の「ヨハネの黙示録」（以降「黙示録」）で、藤田を含む7人の画家が本文に挿絵を寄せた。藤田の画面は執拗なまでの細密描写によって埋め尽くされており、それらの図像は様々な引用源を有することが本人の旧蔵書等の調査から明らかである。3点はいずれも平穏な天界とその下方の混沌とした世界という構図で統一されているが、画面と「黙示録」本文とを照合したところ3点のうち洗礼前に描かれた2点については本文の具体的描写に依拠する部分が多いものの、洗礼後の1点「天国と地獄」についてはそうした合致が殆ど認められなかった。この1点に関し、藤田の日記には「アトミック等ではなく Paradis（天国）をかいたら」というフォレの指示が記されていた。結果、藤田は「天」に加え「地獄」も描いたが、日記からは藤田が「黙示録」と原爆を結びつけていたことが明らかである。

キリスト教文化圏において「黙示録」は常に現実の危機を反映して描かれてきた。1960年前後という時代にあってそれが核の脅威と結びつくのは不自然ではない。藤田の主題理解は単なる物語的材料や挑むべき西欧の伝統という域を脱し、本質的であり且つ自己の時代に即したものであったと考えられる。藤田は本連作ののち自発的に同一構図の拡大作品（1960年、パリ市立近代美術館蔵、ランス美術館寄託）を手掛けたが、その際にも日記に「原爆」の言葉を記した。ここからも藤田の中で「黙示録」と核の脅威とが強く結びついていたことがわかる。更に、後者においても「天」に対して「地獄」を配する構図を維持していた点は、藤田が同構図に黙示録の別の本質、すなわち救済と破壊の不可分性を託していた可能性をも示唆するのである。